

## 第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

### 第5回委員会

#### 議事要旨

日 時：平成20年12月16日（火）18:30～

会 場：武蔵野市役所西棟412会議室

出席委員：高田委員、江上委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、井原委員、和久田委員、  
島田委員、井波委員、近藤委員、増田委員、清本委員、西村委員

#### 1. 議事

（高田委員長） この委員会でコミュニティ、コミュニティ活動、コミュニティセンターについて共通認識をしておいた方がいいということで、副委員長からレクチャーをお願いしている。

##### ①「コミュニティ」をめぐって

- ・江上副委員長より資料1、2に沿って説明。

（江上副委員長） コミュニティをどう考えればいいのかを話したい。武蔵野市民としてこういう考え方を採るのかどうかというたたき台として考えてもらえればよい。

これから話すことは、これまで一般的にされてきたコミュニティの議論と重なる部分と重ならない部分とあると思われる。まず重ならない部分のところから話したい。

コミュニティとは何かということを考える時によく言われてきたことは、地域性と共同性である。しかしひとつめの地域性ということにあまりこだわらないというのが、私の立場である。コミュニティというのは、要するに人と人とのつながりなので、地域の中にとどまっている人と人とのつながりは今時のわれわれにはほとんどなく、地域の枠を超えて地球規模にまで広がっているので、(コミュニティは)必ずしも地域の中にとどまるものではない。一方で逆に、地域の中の人と人とのつながりもあるということもはっきりしてくる。

もう1つ、地域性ということと一緒に共同性ということが、これまでしばしば言われてきた。それはコミュニティにとって重要な考え方だと思う。しかし、共同性ということだけを言ってもだめである。どのように共同性がつくられていくのか、そこを考えない

とだめなのではないかと思っている。

ずばり私はコミュニティとはこういうことだと考えている、ということを資料1の冒頭  
に書いた。先ほど述べたようにコミュニティというのは、地域という枠内にとどまる場合  
と、とどまらない場合の両方があるので、とどまる方、地域の枠組みの中で考える時には、  
区別するためにあえて「地域コミュニティ」という言い方をしている。

読み上げる。「地域コミュニティとは地域の人と人との緩やかなつながりを基礎として、  
みずから対話し話し合うこと（コミュニケーション）によって自分たちにとって“価値の  
あること”を発見し、それを実現するための活動を組み立てていくこと、また、それが可  
能な地域社会」これを地域コミュニティと呼びたい。

私は勝手に「コミュニティの2段階理論」と言っているが、コミュニティは2つに分け  
て考えなければだめだと思う。資料2-1)、2)に書いたが、1つは、コミュニティは人  
と人との結びつきなのだということである。昔の村社会のようなベタベタした結びつき  
ではなく、もう少しさりりとしてスマートなものだろうというニュアンスを「緩やかな」と  
いう言い方に込めている。緩やかな結びつき、つまり、それは人と人との絆だろうと思う。  
繰り返しになるが、そういう緩やかな結びつきは、地域の中にもあるし、地域の外にもも  
ちろん広がっている。

今述べた1段階目が、「土台としてのコミュニティ」である。この人と人との緩やかな結  
びつきのネットワークを基礎として、そこにさまざまな活動が育ってくる。だから、結び  
つきと活動を分けて考えようということである。ここをきちんと分けておくこと、土台と  
その上に乗っている活動はセットになっているが、考え方として分けておくことが1つの  
ポイントである。

「コミュニティは、活動を生み出す「苗床」も含むものであり、活動・課題解決できる  
ことがコミュニティの存立要件ではない」としている。問題解決や活動を組み立てること  
も大事だが、それは何も無いところにいきなり出てくるものではなく、苗床のような人と  
人との結びつきがあり、そこから活動が派生してくるのだと考えたい。

では、苗床からどのように芽が出て活動が育っていくのかということを考えなければな  
らない。土台とその上に乗っている活動との関係と言っていいかもしれない。実はここが、  
共同性がどう生まれてくるのかということでもある。

2. のところに「対話」「共感」「再定義」「価値の共有」「価値の実現」という5つの言  
葉を並べた。まずは「対話」や「共感」という、人と人とのコミュニケーションが出発点だと

思う。

「対話」というのは、討論する、議論するということとは違う。日常的な言葉で言うと「おしゃべりする」といったことに近い。そういう何でもない営みの中から「共感」が生まれてくる。「ああ、そうだったのだ」と、他人の価値観、考え方に気付いていくということが対話の中で起きてくる、ここが出発点なのだ。そこで「自分とは違う考え方の人もいたのだ、自分とは違う生活環境の人がいたのだ」、といった、自分との違いが明らかになってくる。

私は、対話や共感というのは、ある種わがままな世界だと思っている。しかし、それが「わがままな私」の話で終わらずに、「私たち」の話にだんだん展開していくのが、次の「再定義」「価値の共有」である。昔の社会と違って、今の私たちは個々バラバラで多様な生活を持っている。そういう人たちが「私たち」というように価値を共有していくプロセス・活動が生まれてくるのが、共同性が育っていくプロセスである。

「再定義」というのは、私の価値観が再定義されるということである。「私はあることについてこういうものだと考えていた。しかしあの人のお話を聞いていたら、そうとばかりも言えない、こんなふうにも考えられる」と、考え方が変わっていく、新しい発見がある、これが再定義である。これは一方的ではない。私も再定義していくし、あなたも再定義をしていく、そういうやり取りがある。

次に「価値の共有」と書いたが、「結局こういう考え方なのだよね」という合意が生まれていくということである。そこまで来ると「では一肌脱ぐか」という話になり、それが活動、つまり「価値の実現」に育っていく。

冒頭に「対話」と書いたが、「共感・再定義・価値の共有」というところまでが、「対話」にくくられていい。人と話をしながら、その場にいるそれぞれの人たちの中に起こっていくプロセスということである。こういう経験は、私がここで言わなくても、皆ふだん経験していることだと思う。

このように苗床である、土台としてのコミュニティから、価値の共有が生まれてくると、それを実現するために何かをやろうという話になっていく、それがコミュニティ活動、住民活動と言われているものだ。ひとつ言い忘れたが、今の対話のプロセスというのは、タテの関係ではなく、あくまでも対等な人と人との関係の中で生まれてくるものである。

そうやって活動が育っていく、それが2段階の上の段である。活動が生まれてくると、当然土台も変わっていく。活動が活発になれば結びつき方も前とは変わってくる。土台と

上に乗っている活動がお互いに刺激し合いながら、両方が変わっていく。

次に、「3. コミュニティが求められるのはなぜか」。私が話したようなコミュニティが求められるのはどうしてか。かつてコミュニティブームであった1970年代、武蔵野市も三鷹市も、「コミュニティづくり」ということを政策的課題に打ち出した。その頃の「東京砂漠」という流行語は、東京のような大都会では、人が砂粒のようにバラバラの生活をしているということを表したが、たとえば、ご高齢の方が家で亡くなっているのが何週間も発見されなかった、といったことが新聞紙上を賑わせたのは60年代である。そういう社会でいいのか、それにどう対処していけばいいのか、という話の中からコミュニティが必要だということが出てきた。

もう1つの文脈は、市民自治、地域自治と言われるものである。これは革新自治体如花盛りの時代のある種イデオロギッシュな背景を持っているのだが、住民運動などが非常に活発になってくる中で、明治以来の中央集権的な政治の仕組みをもう少し地域割のしくみに変えていったほうがいいのではないかという議論があった。

この2つがドッキングしてコミュニティ政策になっていく。思うに武蔵野市の場合は、後者の、市民自治云々がわりと強調されていたコミュニティ行政である。ものの本を紐解くと、いまだに、コミュニティが必要な理由は何かということについて70年代と同じようなことが言われていたりするが、やはりちょっと違ってきているのだと思う。

ではどういうところが違ってきているのかということで、2つ話す。1つは、功利的な生き方が支配的になっていること。功利的な生き方とは、「行為の判断基準が自分の利益になるかどうか、かけるコストに見合っているかどうか」を常に意識するような考え方である。こういった功利的な生き方が、かつてと比べられないぐらい私たちの生き方の隅々にまで浸透してきているのではないかと思う。

そういう功利的な考え方があるから経済は発展するし、社会は動いていくわけである。だから、これがいけないと言っているわけではない。しかし、あまりにも全体が功利的な生き方ばかりになってしまうと、そこにさまざまな問題が出てくるのではないだろうか。余裕、遊び、一見無駄なことに対する価値がどんどん忘れられてくるということである。

もちろん、功利的な生き方、ものの考え方が支配的になっているということだけで、現代のさまざまな社会問題を語ることはできないが、しかしかなりの部分に、人間性の疎外という形で作用しているのではないかと思う。人間性の疎外といったことの表れの1つは、“ことばによるコミュニケーションの世界”がとても縮小してきていることである。裏返

せば、「お金」と「きまり」がものを言うことである。言葉のやり取りをしながら一緒に考えていく場が、どんどんなくなってきている感じがする。まさに、人と人とのコミュニケーションが、土台として大事だということ、そこをどう取り戻していくのかということが、コミュニティが求められる1つの理由である。

もう1つ、今度は活動と関わってくるのだが「新しい公共」というものがある。一般的に今、日本の自治体はみな大赤字を抱えて青息吐息であるのに、一方で新しい課題がどんどん出てきている。お金はないのにやらなければならないことが増えていくということになってきた、どうしようという時に、では住民の出番だ、という話になっている。これまで公共領域と言われるのは、地方自治体が主にその部分の仕事をするのだと、明治以来日本では思われてきた。しかし先ほど言ったような事情が生じてきているので、そこは上手に住民主体に取り戻していこうということが考えられている。つまり、公共というのはけっしてお役所が担うものではなく、住民も含めて全体で担っていくものだという考え方が浸透してきているということである。それを言い換えると、最近流行の「協働」ということになってきているのだ。

しかし、協働と言うのはいいが、住民側の協働の担い手は誰なのか、ということになる。役所は、しっかりと役所という実態があるからいいが、パートナーになる住民のほうは「これがパートナーだ」というはっきりした像を結んでいない状態だと思われる。そういう中で、住民が公共の担い手になっていく時に、やはりコミュニティ活動というものが、どこかで協働の担い手、新しい公共の担い手になっていくのだろう。

ただ、それは役所からやれと言われて、やることではない。先ほど述べたように、コミュニケーションにより自分たちに価値あることが発見され、それを実現していく、その限りにおいて行政と手を組めるところは組みましようという話である。行政はこういうことをやって欲しいと思っている、しかしそれに全部応じなくてもいい。そこには住民の主体性が求められる。

言葉を換えて言えば、これまで私たちは行政サービスと商業サービスに大きく依存してきた。しかし、その2つではうまく処理できない問題がたくさん出てきてしまった。その問題は、かえって素人である住民が集まって知恵を出し合っていく方がよほどうまく解決できるということがけっこう増えてきている。そういうことから、地域コミュニティでの活動が求められているということである。

最後にコミュニティセンターについても、少し触れておく。コミュニティセンターがど

ういうところかといえば、対話の場ということである。対話の場はいろいろなところであり、別にコミセンだけではないと思うが、そういう対話を仕掛けていく場としてコミセンがあるのだろう。「言葉が生きる場所」「多様な価値と出会える場」「絆をもとに活動を生み出す場」、今コミセンに求められているのは、こういうことだろう。

私がしばしば言っていることがある。コミセンの窓口でこういうことがあったらいやだな、と思うことだが、たとえば利用の申し込みに来た人が「こういう利用をしたい」と言った時、「そういう使い方はできない」と窓口の人が応じ、「どうしてか」と問い返したら、「それはきまりだから」と窓口の人が答えるというやり取りである。コミセンはそういうことですませてはいけないと思う。窓口でのやり取りもある種の対話だと思う。そこから新しい価値観が発見されるかもしれない。コミセンというのは一事が万事、言葉やコミュニケーションを大切にすることであってほしいと思うのである。

武蔵野市のコミュニティ行政はこれまで30年経っている。30年前のことをよく知っている人も少なくなってきたのかもしれないが、コミセンができて、これまでいろいろな活動を積み上げてきた、それが何を残してきたのか。これまでやってきて何を残したのか、ということは、いつも頭の隅に置きながら次のステップを考えていく必要があるのではないか。

#### ・質疑

(高田委員長) 今の話では、コミュニティを2つに分けている。土台と活動を分けたということだが、分けた方の活動がコミュニティ活動ということか。

(江上副委員長) その通り。上に乗っている部分である。

(高田委員長) 対話、コミュニケーションがベースになっていて、それをどうやって形にしていくのか、功利的な生き方の合間に、どうやってこういったことをきちんと入れていくのか、ということが、今まさに求められているというお話だった。非常に分かりやすい規定で、3つのこと(コミュニティ、コミュニティ活動、コミセン)について決めてくれたと思う。

皆さんのほうで確かめたいところがあればどうぞ。

(井波委員) 2段階理論について。コミュニティ条例を読むと、コミュニティの定義の中に地域コミュニティというものが1つあり、2番目に目的別コミュニティがある。これがどうも問題をややこしくしているものではないか。今の話をお聞きして、2段階理論の

1)、これがいわゆる地域コミュニティという概念にあたるのではないかと思った。

次のコミュニティ活動という2番目が、いわゆる目的別コミュニティの範疇に入るのではないかと理解したがどうか。

(江上副委員長) 私の考え方からすると、半分合っていて、半分合っていない。

まず、前提から言っておくと、私は目的別コミュニティというものはないと思う。

(井波委員) これは名称を付けざるを得ないからそのように付いたのだと思う。それがいいかどうかは別にして。

(江上副委員長) 地域コミュニティの中にこの2段階があるのだが、目的別コミュニティと条例で言っているものは、その2階部分だけを指しているのだと思う。

コミュニティというのは、目的ばかりを意識しなくてよいところがいいところだと思う。NPOのようなものは当然目的を持っている。しかし、それはそういう団体の活動なのであって、コミュニティの中にひっくるめたくない。別物だと考えている。

(井波委員) 資料2、2ページの中ほどに「まず前提となるのは、横のつながりとして人と人との緩やかなつながりがあるということ」とある。これは分かる。「これが地域社会という一定の空間的範囲の中で成立している時に」と書かれている。ということは、これは成立しているという前提があれば、地域コミュニティが存在するということだろう。

私はその前提にかなり問題があるのではないかと考える。もっと言えば、地域コミュニティという言葉自体に曖昧さがある。言葉があるから必ずそれが実在するとは言えない。

(江上副委員長) 緩やかなつながりが無いということがあり得るといふことか。

(井波委員) ないということはないと思う。

(高田委員長) 普通のコミュニティの中には縦の関係があるということか。

(井波委員) そこまでは言っていない。たとえばコミュニティ協議会などに、その地域のコミュニティの形成といったことまで背負ってもらうのか、それは少し無理があるのではないか。むしろ資料1の2ページにコミュニティが求められるのはなぜか、この実態は、1番目の功利的な生き方のほうではなく、2)の新しい公共の担い手として、行政から一般市民に求められているのではないか。そうでないと、コミュニティ条例の目的に書かれている「協働」という言葉にそぐわない。

(江上副委員長) コミュニティ条例があるからコミュニティづくりをやっているわけではない。コミュニティづくりというものがあるから、それをあとづけるためにコミュニティ条例があるという話だろう。

(井波委員) コミュニティ条例をつくった目的の中に「市民と行政の協働による快適で住みよいまちづくりに寄与することを目的とする」と書かれている以上は、ここでのコミュニティがなぜ求められるか、ということは新しい公共の担い手として求められているのではないか。

(江上副委員長) それはまさに武蔵野市民の選択の問題であって、コミュニティ条例にそう書いてあるから、そうやるのだという考え方もあるだろう。他にもいろいろな考え方があって、そのためにコミュニティ活動やコミュニティづくりをやっているという考え方もあるだろう。それはいろいろあってもいいと思う。私個人としては、条例というのはあとから付いてきたものだと思う。そもそも、公の施設の管理委託のためにそういう条例が必要だということである。

(高田委員長) 「あくまで対等の関係で」という点について、地域社会というところは、普通、対等の関係だけではなく、縦の関係が町内会にしても、親戚関係にしても、いろいろなところにある。そういったところはどうするのか。むしろ対等な関係をつくること自体が難しいので。

(江上副委員長) 結果として対等な関係ができていくということもあると思う。しかし、100人住民がいたら、100人全員が対話に参加するのだということではない。町内会のように全戸加入に相当するという話ではない。縦の関係はあるが、それとは別のところで横のつながりがあって、そこで対話が生まれてくるということでもいいのではないか。

(橘委員) 普通の社会であれば上下関係が必ずある。親子関係もそうだし、会社の上司、部下もそうである。しかし、地域の中では、まずまったく見知らぬもの同士のコミュニケーションがスタートになる。そういった関係からすると、相手のもと大会社の社長であろうが何であろうが、まったく関係がない。そこでお互いに平等な関係で対話生まれ、いい関係ができて、ということはいくつもある。それが今求められているコミュニティではないか。

東京砂漠ということが、それが出発点であることは間違いない。あまりにも人間関係が希薄であるというところの反省から生まれてきたものだと思う。それではいけないだろうと、人間はやはり1人では生きていけないという前提があると思う。そういう中で、お互いに顔見知りになり、おしゃべりができるということ。したがって、コミュニティというのは理屈付けでは難しい話になるかもしれないが、そんなに難しい話ではなく、やはり気



楽に、もとの身分がどうであろうと話ができる仲間づくりというぐらいでいいのではないか。

(高田委員長) うまくいっているコミセンは関係が横の関係のみになってくる。縦とは別のところで対話が生まれてくる。しかし、大会社の社長で横になれない人がいる。

(橘委員) そういった人はコミュニティに入ってこられないから、仕方がないだろう。

(高田委員長) そうすると、コミュニティというのは、横になれるような人が集まるところであって、普通の人はみんな縦を残している。縦関係のある人はコミュニティから排除されてくる。本来ならばコミュニティというのは、そういったいろいろな人を全部包括的にして、もう一度縦の人も横になってもらう、そういったことが必要だと思う。縦の関係を持つ人が入れなくなってしまうのは問題ではないか。

(橘委員) それは個人の、ある意味では性格の問題。そこまでわれわれが考慮してやる必要があるのだろうか。仲間としていらっしゃいと言って、来てくれればそれでいいし、「自分はいやだ」という人を、無理に引っ張ってきても仕方がない。現実は無理に引っ張ってきたけれど、どうしても馴染めなくて去っていったという人もいる。しかし、それがすべてではない。会社のOB会をやったとしても、元の上下関係がそのまま出てしまう。これはつまらないこと。今のコミセンの人たちとお付き合いは、そういったことがないから、気持ちよくお付き合いできる。私はそう考えている。

(江上副委員長) 今の高田先生のお話で、コミュニティというのは人々を包括していくものだとおっしゃった。私は必ずしもそう思わない。人と人とのつながりについて、ネットワークという言葉を使うとすると、ネットワークの濃淡があって、ネットワークの固まりが地域の中にたくさんあっていいと思う。場合によっては、地域に馴染めない社長さんのような人は、それこそ地域とは関係のないネットワークの中で、たとえば会社のOB会などで活躍していただければいいわけで、必ずしも地域のネットワークの1メンバーになる必要はないと思う。

(高田委員長) 縦の考え方の入ったネットワークもあると。

(江上副委員長) それはそれでいい。いろいろなネットワークがあると思う。

(高田委員長) 私もけやきに属しているが、何とかけやきのお互いの横の関係を、もう少し地域の中に広げていくことができないだろうか、という活動をするのが念頭にある。縦の考え方の残っている人を排除していくのではなく、自分たちの仲間として取り入れていく、先ほどの価値観の転換というところの契機になるようなところで広がっていかない

かと思った。単にそれを外してしまうというのはどうか。

(島森委員) コミュニティセンターでの私たちの活動は、何か種をまいて芽が出るような部分ではないかと、20年ぐらい前から思っている。

たとえば20年ぐらい前に「私のことを話そう」という活動があった。地域の中でご自分が得意だと思っていることを披露してもらい、得意とすることは本当にありとあらゆる方向性がある。そういった話を実際に話していただいて、共感するものがあれば、そこへ行くのもよし、呼ぶのもよし、という感じで、まずいろいろな方向性を出した。また、そこから私たち自分たちの中に取り入れることをしてきた。

まいたことによって、共感した同士でまた新しい活動が生み出される。そしてできたものでまた新しい見方や考え方がプラスされ、さらなる活動が増えていくという方向で、やってきたと思う。したがって、とにかく一番大事なのは対話、コミュニケーションだと思う。とにかく話すこと、聞くこと、そういうことをするうちにいろいろな活動が見えてきて、そこからまた新しい活動をつくっていく。悩みもあるが、その上でどこのコミセンも新しい活動を考え出しているのだと思う。

活動している最中だが、お父さんたち世代、団塊世代の方たちが定年になってどうするかという時、地域の中に入ってきて、何でも一緒にやってそれに喜びを感じる方もいると思う。

最初は男の人たちが入ると、お母さんたちのパワーはすごいと、ちょっとへこたれる部分があるが、お父さんたちならではの活動、女の人たちにとってはとても魅力のある活動もあって、それがうまくいった時には活動していける。

中には、やはり偉い立場にいた方はなかなかそういう世界に馴染めない。しかし、馴染めない方はそれで仕方がないと思う。そういう方はそういう方面で違うものを見つけて、仲間同士で何かやっていくこともコミュニティだと思う。

お聞きしたいのだが、目的別コミュニティということについて、あるダンス関係の団体で、ダンスを踊るという目的を持って活動をしている中で、何年も活動しているうちに知り合いになって、対話が生まれて、人生相談ではないが、電話をして相談をするような関係になったという例がある。そういったことも1つのコミュニティではないかと思うが、どうだろうか。

(江上副委員長) その通りではないか。要するに活動が目的を持っているということと、活動を生み出す土台に人と人との結びつきがあるということに分けて考えようということ。そのダンスのグループもこちらから見れば人と人との結びつきという点でコミュニティに見えるし、もう一方から見れば特定の目的を持って活動を担っている団体だと、両方の顔を持っているのは当然そうだと思う。

(橘委員) 先生のお考えの中には、個という視点があまり出ていないように思う。私の考えとしては、コミュニティの一番の母体は個ではないかと思う。ある組織を背負ってコミュニティセンターの運営委員に入ってきた人もいるが、これはけっしてうまくいかない。そういったケースは他のコミセンでもたくさんあると思う。やはりベースになるのは個、個人だと思う。個人であるが故に、先ほど言ったように、大会社の社長であろうとなんだろうと、とにかく対等の付き合いができるということではないか。

(江上副委員長) それができていることは、全国の中でも武蔵野市は、かなり希少な例である。普通は、そういった話になるとまず出てくるのは町内会である。

(島田委員) 武蔵野は希少な例だということだが、よそには町内会的な話が多いと言われる。逆に、私は町内会のようなもの、昔の町内会を言っているのではないが、やはりこの町内をいかに安全に安心して住めるようにすることも考えるのは、どこがやるのかと。そういったことをコミュニティとして考えていくのはどうなのだろうかと思ったのだが、先生の考えとは違うのだろうか。

(江上副委員長) いや、その通りである。私の考えでは、この町の中が最近ちょっと危ないということを感じる人たちが、まず何人かで話を始める、それが対話である。最初は3人、4人で、この町の安全をめぐる井戸端会議のようなものができてきて、やはり自分たちが一歩踏み出さないと町の安全は誰も担ってくれないという話になった時に、その人たちがどういう工夫をして活動を組み上げていくか、そこの部分だと思う。

なにがしかの課題が見つかって、こういうことが大事なのだというみんなが認め合えるような価値が見つかって、それを実現していくためにはどういうグループを立ち上げればいいのか、あるいはどういうグループと協力し合えばいいのか、そういうことが議論されて、ではこういう仲間でやっぺいこうとなっていく、そういうことなのではないだろうか。

(橘委員) やはり、物事を進める時は誰かが言い出しっぺにならなければだめだろう。

(島田委員) そういった方法もあるかもしれない。武蔵野の行政は、そういったことに

ついているいろいろな柱が立っている。それをうまくまとめていくという手もあるのではないか。それを両方でやらないとうまくいかないと思う。

(江上副委員長) 担っているグループ、柱の中でも、ぜひこういう発想がほしい。その柱の中は、縦の関係になっているものもあるかもしれない。

(江上副委員長) 2つだけ補足したい。1つは、コミセンが対話、共感の場といったことを言ったが、たとえばコミュニティカフェがそうではないかと思う。市内にはけやき茶社や南町のみ一なカフェがある。全国的にも駅前商店街でシャッター通りになった空き店舗を安く借りて、NPOがコミュニティカフェのようなものを始めている。ふらりと立ち寄れて、そこで話をしてもしなくてもいい。たまたま気の合う人がいればお話をしてもいい、そういうおしゃべりする場をつくるという活動がある。カフェなので、別に上も下もない、みんなお客さんで集まった人たち、その限りで平等な関係ができています。そういう活動が最近の流行である。そこでは、私の言う対話のサイクルのようなものを生み出していく仕掛けとして有効だと思う。

それからもう1つは、今日お話したようなことは、武蔵野市の皆さんからお話を伺ったり、活動を見せていただいて、武蔵野市のことを勉強しながら、まとめてきた成果である。したがって、どこかの空理空論ではない。武蔵野市で実際におこなわれていることを、言葉を選んでまとめれば、こういうことになるのではないかということを示した。

(渡邊委員) 私たちはコミュニティ協議会に携わっているが、現実がいろいろある。その中で対等な関係の対話を通じてコミュニティづくりの土台をそこからつくっていく。そしてそこから課題や共感するものがあれば、それがコミュニティ活動、あるいは住民活動につながるという動きは非常にいいと思うし、それに向かって頑張っている。問題にぶつかるとそこへ帰ってきて、対等な関係で対話をするという繰り返しでいくことが一番いいと思う。

しかし、現実はまだなかなかそうはいかない。対等な会話をする自身も難しい。いろいろなものを担いできたり、縦の関係が入ってきたりと、いろいろなことが入る中で、今度は勢力争いのようなことをやったり、偉い人がいて怖くて話ができないとか、そういうことで悩みながら、けやきのように偉い人を作らないでスムーズにやっていくというところから学びながら活動している。

いろいろ見ていると、そんなに生やさしいものではないと思う。今日お話しを聞いて、そういうことで悩んだ時に、本当に対等な対話をちゃんとしながら、そこから共感を得て、自分のニーズや欲求を実現するためのコミュニティ活動に結びつく、この図式に戻りながら、悪いところについて、お互いに対等な対話をしながら改善する、今自分で携わっている中で、そういう循環がいいという意味で、大変いいお話を伺ったと思う。

現実との間に乖離がある。たとえば条例制定の時にもいろいろ議論をした。地域コミュニティ、目的別コミュニティ、電子コミュニティと、整然と区別されてある。どうやって区別するのかなど、疑問に思いながら。たとえば社協、クリーン、青少協など、始めから行政課題や地域のニーズをきちんと持ってコミュニティをつくるのが目的別コミュニティなのかと。地域コミュニティというのは、それを全部包括した意味でいろいろあって、目的別コミュニティとネットワークをつくりながら、協働の基盤を追求していけばいいのではないかとも考えたりする。

(江上副委員長) 対等な関係というのは、言い換えると、お互いに思っていることを言い合える関係ということ。変に、「あの人はこういう人だから言わないでおこう」とか、遠慮といったことがない、考えていることを素直に言い合える、大事なところは「合える」というところである。

(島田委員) 最近感じるのは、言いつばなしの人が多。聞かない人が多い。それができて初めて対話になるのだと思う。

(江上副委員長) もちろんその通り。

(島田委員) そこが難しいのではないかと。先ほど窓口の話もされていたが、どちらかというと、短時間で話をやめようとする場合が多いと感じられる。

(江上副委員長) コミュニティ活動、コミュニティづくりというのは、能率が悪いものである。民主的にやろうとすればするほど時間も手間もかかる。

(清本委員) うまくいっているコミセンとコミュニティ活動と、あまりうまくいっていない活動があると思っていた。うまくいっているところは、土台としての苗床がちゃんとできているところであって、うまくいっていないところは対等なコミュニケーションが取れていないところだということが、よく分かった。

(増田委員) 私は、3つぐらいコミュニティ、団体に属している。それを思い出しながら話を聞いてその通りだと思った。対話、共感、再定義、価値の共有の実現というのは、

価値の共有までで土台をつくるという感じだろう。その土台がないと、結局活動に進めないのだと思った。その活動が滞ってしまうのは、途中の共感あたりで止まってしまっているからではないか。

いろいろな活動をしている団体はそれぞれ違うが、やはり功利的な生き方が中心の人が多く、自分にメリットがあるかどうかということがとても重要で、メリットがなければ、あっという間にいなくなってしまうことがある。やはり対等な立場でのコミュニケーションというのは、努力するというより、コミュニケーションを取っているうちに友情が生まれたりすると、対等に話ができるようになる。したがって、会話はとても大事だと思った。

(江上副委員長) 対話と活動ということと言うと、活動がうまくいかないというのは、結局対話がないからということがある。両面あると思う。対話があつて活動が生まれてくる、活動がうまくいっているというのは対話がある、逆に活動がうまくいかないのは対話がない、あるいは活動が形式的になっている。

(増田委員) 片方が対話を求めているのに、相手が対話を求めていないと、やはりだめである。まず向き合うことが第一歩だと思う。

(井原委員) 子どもが生まれてから今までとは違った人たちと知り合うようになって、団体、たとえば父母会というところから入っていくが、その中で団体の知り合いを超えて親しくなれる人たちがいて、その人たちとやっていることが、対話、共感、再定義、価値の共有、そこから活動も出てくるが、そういうことがあつて、その通りだと思った。

私の場合は、実際に子どもがいて、子どもの関係で広がっていく。コミュニティと呼べるかどうか分からないが、つながりがある。

ただ、回りの父親たちを見ると、(会合などに) 出てこない。父母会で集まる時にも、お母さんが子ども連れで来ている。お父さんは何をやっているのかと思う。お父さんが家にいて子どもの面倒を見ているか、お母さんが子どもと家にいてお父さんが出てきたらいいのと思う。ここ10年ぐらいずっと見ていて、どこに行ってもそういう傾向が強い。もちろんお父さんも出てきてはいるが、とても少ないし、ここ数年、どんどん減ってきている。

団塊の世代とどう関わっていくかということもそうだが、いずれ50代60代になって、会社から外れた時、今の父親たちは同じ轍を踏んでいくのだろうと思う部分がたくさんある。

また、私はPTAの立場でここに来ているが、PTAでは規約ありきで、他者の価値へ

の気付きがない。規約の価値ばかりにとらわれていて、今私たちは何をするためにここに集まっているのだろうということを考えていない。規約があると何か新しいことをやろうとしても、「これはきまりだから」ということでストップしてしまう。PTAの中にもコミュニティとして必要なのは対話。きまりがこうだからということではなく、いろいろなことが必要だと思った。

## ②基本構想・調整計画等との関連について

・事務局より資料3について説明。

(井波委員) 諮問事項について。抽象的な項目は3番。コミュニティ活動について、今日の資料を見ても、言葉の使い方が非常に荒っぽい。地域コミュニティと書いたり、コミュニティと書いたり。もっと言葉を適切に使ってほしい。

たとえば、資料3の第六期コミュニティ委員会を設置するというところに書かれているが、これも「こうした課題を整理し、地域コミュニティのさらなる活性化のためにコミュニティとコミュニティセンターのあり方について、広く検討するため」となっている。ここで地域コミュニティのさらなる活性化のために、ということは分かった。次のコミュニティというのは、いったい何を指すのか。「市民活動の活性化と協働の推進」というところでは、「今後の地域コミュニティには防犯・防災活動や高齢者・障害者への支援、子育ての見守りなどを通じ、新しい連帯をつくっていくことが期待されている」と書かれている。どうも、第六期委員会を設置するにあたって、ここで書かれているコミュニティは、目的別コミュニティではないかと理解してしまうが。

先ほどの渡邊委員の現場からの声では、私もそう思うが、目的別コミュニティがいくつか重なり合って、それで地域コミュニティができあがっていると思う。地域コミュニティが先にあるのではなく、そういうものから地域コミュニティができていると、理解している。言葉のこともきちんと確認しておきたい。

(事務局・渡部課長) この3番で言っているコミュニティ活動については、目的別コミュニティ、地域コミュニティと入っていないので、包括した意味だと取ってよいと思う。

(島田委員) いろいろ調整計画や基本計画で言われているが、今まで論議していることとそこに書かれていることに若干ずれがあるように思う。市としてはコミュニティにこん

な方向で行ってほしいという思いは出ている。しかし、基本計画、調整計画に入っているものが実際にコミセン、コミュニティに携わっている方々にあまり伝わっていないのではないかという気もするので、説明をお伺いしたい。

(事務局) 今回の調整計画の中では、コミュニティに対する熱い思いがある。防犯防災の問題もあるし、子育ての問題もある。あらゆるものが地域を中心としてやっていくべきだろうという思いが非常に強くある。

ただ、調整計画の策定委員の中でも、それだけ地域に負担をかけていいのか、ということがあった。またコミュニティとコミュニティセンターは違うし、コミュニティ活動も違うので、それをもう少し地域の中で、市民の方々に考えていただいた方がいいだろうということがあり、あまり断定的にこれとこれをコミュニティでやるのだという話ではない。

先ほどあった子育てや防犯などの課題について、そういったことをやっていただきたいと思っているが、実際には市民の方々に考えていただきたい。したがって第六期の市民委員会で論議していただく、そういう考え方である。

○その他

・事務局より資料6、資料7について説明。

○第7回の日程について

・2月27日(金)に決定。

[了]